

原著序文

本書は、環境問題に関心のある全世界の科学者、行政担当者、企業の研究者さらには一般の方々に、人工の奇跡の化合物といわれた PCB (polychlorinated biphenyls) とその関連化合物が起こしたこれまでに前例のない食中毒事件のすべての状況を知っていただきたいと願って出版する。読者には、この不幸な出来事についてわれわれが知り得たすべてのことが、現代の科学の進歩によってもたらされた悲劇であることを理解していただきたい。

1968年、かつて Jensen が、「人間だけでなく環境も、1930年代から広範に使用されてきた PCB (polychlorinated biphenyls) によって汚染されている」という有名な警鐘を発してから2年後に奇病が、西日本一帯に発生した。この病気は、九州大学の研究チームによって先の化学物質で汚染された米ぬか油の摂取によって起こった食中毒であることが、すぐに明らかにされた。「油症」と呼ばれるようになった、この新しい病気は、これらの化合物の残留性が極めて高いために、当初の予想を超えて、従来の医学的手段で処置することは遥かに困難であることが、やがて明らかになった。塩素化炭化水素による環境汚染の広がりが懸念され、地球的な規模で生態系を脅かしている事実が明らかになるにつれて、いまや油症は全世界から注目をうけるようになった。それ故に、油症研究は、この病気の被害者のためにも、また、同様の化学物質による広範な汚染に曝されているわれわれにも重要なのである。

奇病の原因を究明する最初の試みは、多方面からの協力体制のもとに順調に進行した。その経過は、他の健康障害の事件解決にも参考になるので、その結果と共に詳細に述べている。さらに、被害を受けた患者を治療するという、われわれの究極の目的を達成するために、原因化学物質を特定するとともに、生化学的に、薬理的に、また病理学的な作用を解明しつつ、患者に最適の治療を提供するための臨時的な、また治療学的な検診をも併せて体系的な研究体制が組織された。本書には、過去27年間に研究グループによって行なわれた種々の研究成果が要約して示され、解説も加えられている。この病気の研究が、どのように時の経過とともに進んだのかを読者が、よく理解することができるように、可能なかぎりそれぞれの研究の背景を含めて説明するように配慮されている。他の研究者によって行なわれた油症関連の多数の研究の結果も、この本に収められている。

さらに、患者にとっては、有毒な炭化水素、殊に発癌性の疑われる PCDF (polychlorinated dibenzofurans) ができるだけ速やかに解毒されてしまうか、あるいは体内から排除されることが望まれる。その願望に沿うために、多くの動物実験を行なうとともに種々の根本的治療実験に焦点を定めて努力が重ねられた。永年に亘る努力にもかかわらず、なかなか満足できる効果を与えることが難しかったが、最近になって、日本と台湾で米ぬか繊維とコレステラミンを忍耐強く患者のボランティアが服用することによって、炭化水素類の大便への排出の促進を認めることができた。この一連のたいへん困難であった臨床試験を非常に誇りにしている。多くの面から独創的治療法で、しかも有効とみなされるので、この研究の結果について詳細に述べられている。読者におかれては、この重要な問題についてコメントあるいは提案があればお寄せいただきたい。この独特の病気によつ

て影響を受ける患者の予後は、未知であり、懸念されるところであるので、詳細に記述されている。それに加えて、油症事件に関連して、この病気に関して政府によってとられた行政と被害者によって提訴された訴訟のように、科学的出版物では取り扱われなかった面についても言及した。

本書は油症の科学に限らず、すべての面をカバーすることを意図している。油症研究は、長年に亘る被害者福祉のために捧げられてきた多くの人々の協力の賜物である。疑いもなく、この出版事業は、患者からの支援と協力なくしては成し得なかったものである。それ故、編者は関わられたすべての方々に心から感謝するとともに、この出版が企画した目的を効果的に果たすことができることを望んでいる。

編者

倉 恒 匡 徳

吉 村 英 敏

堀 嘉 昭

奥 村 恂

増 田 義 人

(翻訳責 小栗)